食事・排泄・入浴（拒絶・拒否以外）

No.	表題	症状・BPSDについて 起こった出来事	事例提供者	背景や生活状況、病状など	症状・BPSDに対して 行った支援	結果 その後のご本人、介護者の状態
1	サービス利用のケース	尿意・便意を感じると行動が不穏となり、失禁が続いていた。	訪問看護ステーション 理学療法士	独居で自宅内で転倒し手術をした方である。入院前から日常生活動作が低下していたが、伝え歩きはできる。	ヘルパー、家族の協力により訪問回数を増やした。また、訪問時間を排泄時間にあわせ、トイレ誘導をした。	失禁の回数が減り、安全にトイレに行けるようになった。
2	サービス利用のケース	布パンツを使用している。失禁が多量にあるが、本人は失敗したことを認めない。そのため、自宅内の衛生面が保たれていない。	居宅介護支援事業所 ケアマネジャー	独居。数年前に散歩中に脳梗塞で倒れた後、介護申請をした。高血圧であるが病院、薬嫌いである。「自分の身体は自分でわかる」と服薬をしない。	家族が関わろうとすると怒るため、馴染みのスタッフがいるデイサービスをほぼ毎日利用した。また、顔見知りの支援者を増やすよう情報共有した。	失禁はあるが、馴染みのスタッフが増えたことで安心でき、リハビリパンツへスムーズに移行できた。デイサービスを毎日利用することで、家族の負担軽減となった。
3	ケアを統一したケース	トイレの場所が分からなくなり、廊下の端やごみ箱の中などに排泄をしてしまうことが続いた。	訪問看護ステーション 看護師	施設に入所中。自力歩行可能であるが、転倒の危険もあり、センサーマットを使用している。	本人の部屋からトイレまでの道のりに矢印で案内する紙を貼り付けた。	トイレで排泄できるようになった。
4	ケアを統一したケース	他の利用者と同じホールで食事をしていると、他の利用者の食事に興味を示し、自分の食事に集中できない。	訪問看護ステーション 看護師	施設に入所中。他の利用者と同じホールで食事を食べている。	食事に集中できるように個別で食事ができる場所を用意した。	自分の食事に集中して食べるようになった。
5	ケアを統一したケース	ゆっくり食べてもらうように伝えるが、食事をかき込むように食べる。むせが多い。	訪問看護ステーション 看護師	娘さんと妻と本人の3人暮らし。認知症により発語が少なく、嚥下状態が悪い。	スプーンを小さいものに変えた。	１口量が減り、むせが減った。
6	ケアを統一したケース	目の前の食べ物やお菓子があると全て食べてしまい、体重が増加してしまった。	訪問看護ステーション 看護師	お孫さん2人と本人の3人暮らし。お孫さん2人は就労している。週３回デイサービスに通所している。	必要量以上の食事やお菓子は本人の前に出しておかないようにしたり、食事は大皿ではなく家族それぞれに個別に出すようにした。このような工夫をデイサービスと自宅で統一をした。	必要量以上には食べることはなくなった。
7	ケアを統一したケース	バイタルサインは不安定で物忘れが悪化していること、入浴できていないことの相談が娘さんからあった。入浴をすすめても、「入っているから、大丈夫」と清潔ケアには結びつけられなかった。	訪問看護ステーション 看護師	本人と、介護が必要な夫、娘の3人暮らし。10数年前から夫の自宅介護を担っており、その頃より認知症症状がで始めた。娘さんは仕事があり、日中不在であるため、訪問看護の依頼があった。	「風呂場の湯を出したい。教えてください」と風呂場に誘導して、シャワーチェアに座ってもらい、「濡れちゃうから」と説明してから脱衣を促して、シャワーをしてもらった。	毎回同じように誘導し、入浴することができるようになった。

食事・排泄・入浴（拒絶・拒否以外）

No.	表題	症状・BPSDについて 起こった出来事	事例提供者	背景や生活状況、病状など	症状・BPSDに対して 行った支援	結果 その後のご本人、介護者の状態
8	ケアを統一したケース	デイサービス利用時、トイレ以外の施設内の廊下・洗面所・事務所内で排泄してしまう行動があった。そのような時に声を掛けると、手を振り払う行動をとり、興奮した様子となる。	居宅介護支援事業所 ケアマネジャー	夫と二人暮らし。外出先から戻れなくなり認知症専門外来を受診した。	トイレに行きたそうな様子がないか、本人の仕草を観察し、決まった時間でトイレ誘導をした。	自宅・施設ともに、トイレ以外の室内での排泄行為はほとんどなくなった。施設内を歩いて回る行動は継続するが、歌を口ずさむ様子が見られるようになった。
9	ケアを統一したケース	歯磨き後、トイレに誘導するとトイレの認識が出来なくて、混乱してしまった。スタッフの声かけで更に混乱が強くなってしまった。	デイサービス 看護師	身体面の自立度は高い。認知機能の低下がみられ、失行・失認がある。それにより介護者の話がうまく伝わらない。	認知症状により介護者の話がうまく伝わらないので、過度な声掛けをすると混乱を助長すると考え、混乱した場合は一度関わりをやめてデイルームに戻るなど工夫した。	過度な声掛けをせず、テレビを見てもらっているうちに落ち着いてくる。自ら席を立ち上ろうとするタイミングでトイレに誘導すると、スムーズにトイレに行き排泄できた。
10	ケアを統一したケース	便座に腰を下ろすまで見守りが必要となった。排泄後に汚れた紙を持ったまま出てきたり、ポケットに入れていたり、便器の汚れを手できれいにしようとする行動がみられた。	デイサービス	トイレでの排泄は自立していたが、次第に介入が必要になった。	排泄が終わった時を見計らって声を掛けて中に入り、手に持っている汚れた紙を便器の中に捨ててもらった。ポケットに入れてしまっていた時は、「〇〇入っていませんか？（〇〇は、紙と言わないで他の物の名前を言う）、ちょっとポケットの中を見てみて下さい」と言い、自分でポケット内を探してもらうようにした。	本人に探してもらったり捨ててもらったりして対応した結果、トイレ内で見守りができるようになり、清潔が保てるようになった。
11	ケアを統一したケース	声掛けの誘導でトイレまで自分で行くが、トイレでの行動が分からなくなる。使用後の紙をしまい込んでしまうことがある。	デイサービス	夫、娘さんと３人暮らし。別居している娘さん２人が、時折自宅に来て介護に関わることがある。	本人の様子を見ながら、次の動作ができるように声掛けをした。紙は便器に捨ててほしいと伝えた。	声を掛けると怒りっぽくなってしまう時があるが、そのような時には危険のないように見守り、改めて声をかけ直すことで失禁はなく排泄ができるようになった。
12	ケアを統一したケース	若い頃から偏食で、毎日３食菓子パンを食べていた。何度か食事内容の指導をするが、改善が見られない。	訪問看護ステーション 看護師	妻と2人暮らし。糖尿病のため血糖降下剤内服中。日常生活動作は見守り。認知症状は徐々に進行している状態。	紙に「高血糖の為、食事内容の改善が必要です。菓子パンは1個/日までにしましょう」と書いて壁に貼った。	その日より菓子パンを食べなくなり、妻が作った食事を食べるようになった。また、自分は糖尿病である事を意識して生活ができるようになった。